

ヴェノナと現代史再検討

福井義高

青山学院大学大学院

国際マネジメント研究科

〒150 - 8366 東京都渋谷区渋谷 4 - 4 - 2 5

fukui@gsim.aoyama.ac.jp

2011 年 12 月 5 日

付記

本稿は福井義高（2006）を要約したうえ、加筆（特に占領期経済政策・独ソ戦・ミトローヒン文書の部分）及び修正（マッカーシーの評価）したものである。本稿作成にあたっては、太平洋問題調査会（IPR）研究会での報告の機会を与えていただいた山岡道男教授（早稲田大学）、コメンテーターを務めたいただいた佐々木豊教授（相愛大学）及び研究会参加者各位より数々の有益なご助言を頂戴した。この場を借りて皆様に感謝申し上げる。

ヴェノナと現代史再検討

死を規定するその目的の正しさは、また歴史によって十年後、数十年後、あるいは百年後、二百年後には、逆転し訂正されるかもしれないのである。

三島由紀夫

1. ヴェノナ文書とは

1995年7月に米国政府が公開したヴェノナ (VENONA) 文書は、米国共産主義運動研究の第一人者である Haynes and Klehr (1999, p. 1)の言葉を借りれば、「二十世紀米国史に対する再検討を迫る」存在。

第二次大戦中から戦後にかけて、対ソ連諜報活動の一環として、米国（と他国）で活動する KGB と GRU の作業者とモスクワ本部間の暗号電信を軍の情報機関である NSA¹が入手し、1940年から1948年の電信の解読作業が、1943年から1980年まで行なわれていた。この解読プロジェクトのコードネームがヴェノナ。1946年に最初の解読に成功し、1950年代はじめまでかなりの部分が解明され、三千近いメッセージが解読済み。ただし、未解読の部分も残ったまま。現在、NSA のホームページ²で閲覧可能であり、Benson and Warner (1996)に主要なものに関連資料がまとめられている。

ヴェノナはジョセフ・マッカーシー上院議員のような「赤狩りの狂信者」たちの予想をも上回る、三百名を超える米国人（あるいは永住権者）がソ連のエージェントとして活動し、しかも、その中には何人ものルーズベルト政権高官が含まれていたことを明確に。ただし、いまだ二百名近くのコードネームの同定ができず、実際に誰であるか不明。

プロジェクト進行中はもちろん終了後も長らく公開されなかったのは、米国側諜報活動の手の内をソ連に見せないという安全保障上の理由。しかし、この政策は米国の共産主義をめぐる歴史論争を不毛なものに。

従来、共産党は進歩的勢力のなかの最左派であり、民主的体制下での批判勢力に過ぎず、戦後米国における反共政策はマッカーシーに代表されるように根拠のないデマに基づく進歩派弾圧であるという主張が広く行なわれ、一種通説化。しかし、ロシアでの資料公開³やヴェノナ文書により、アール・ブラウダー書記長以下、米国人エージェントのほとんどが共産党員であり、米国共産党が組織的にソ連のスパイ活動の一翼を担っていたことが明らかに。コア・メンバーの周辺には、はっきりとは知らされなくても、諜報活動の一環としか考えられない作業を喜んで行う党員が大量に存在し、ウィティカー・チェンバーズのよ

¹ 以下、機関名変遷による混乱を避けるため、原則としてもっとも知られた名称で統一。

² http://www.nsa.gov/public_info/declass/venona/dated.shtml。

³ ソ連側資料については Klehr, Haynes and Firsov (1995)、Klehr, Haynes and Anderson (1998)、Weinstein and Vassiliev (1999)、Haynes, Klehr and Vassiliev (2009)、日本語では名越 (1994) を参照。

うな例外を除き、ほとんどだれも政府に通報しなかった⁴。しかも、その周りにはスパイ活動が行なわれているのを知りつつ彼らを擁護するジャーナリストや知識人が存在。

ソ連・米国共産党は **dupe** の利用に長けていたとはいえ⁵、1936-1938 年の「スパイ」裁判と大粛清、1939 年の独ソ不可侵条約の両者を正当化し、ソ連を美化し続けた知識人は、諜報活動に直接かかわってはいなくとも、もはや **dupe** ではなく「スターリンの代理人」というしかない。

結局、チェンバーズやエリザベス・ベントレーのような「プロの反共屋」の主張が実は正しく、米国政府は真実を知りながら隠していた。従来、マッカーシーについては、その証拠に基づかないセンセーショナルな追及手法が、外国政府のスパイ活動から国を守るといふ正当な行為にいわれのない汚名を着せ、かえってソ連とその同調者を利することになり（反・反共主義の蔓延）、彼こそソ連最大の「味方」あるいは「資産」だったというのが、反共リベラルや保守派の間でも通説。しかし、Evans (2007) は膨大な一次資料を基に、（ルーズベルトと異なり）表向きは反共姿勢を打ち出していたトルーマン・アイゼンハワー政権の隠蔽体質に挑戦し「抹殺」されたという新たなマッカーシー像を提供。少なくとも、マッカーシー全面否定論ともいえる従来の通説に大きな疑問符を突き付けた。

なお、マッカーシーの政策スタッフの一人がロバート・ケネディ（兄の下で司法長官、後に暗殺）であり、反共リベラル・エスタブリッシュメントの共産主義（党）観が、マッカーシーの中央政界進出以前から、彼と基本的に同じであったことについては、後にケネディ大統領のブレインとなる Schlesinger (1946)などを参照。

2. 原爆スパイ活動⁶

自白したイギリス籍の亡命ドイツ人物理学者クラウス・フックス（仮釈放後、東ドイツに移住）らはもちろん、最後まで関与を全面否認し処刑された「赤狩りの殉教者」ローゼンバーグ夫妻もヴェノナに登場。しかし、米当局は、裁判の公正さへの疑問を払拭するより、安全保障上の考慮つまりヴェノナ文書非開示を選択。「祖国」ソ連への忠誠に命をかけた夫妻の殉教は、二人の思惑通り、ソ連その他の共産党政権や内外の共産主義者の大きな武器に。

FBI は KGB と違い、十分な証拠が必要となる刑事裁判で手の内を見せるより、スパイ活動の無害化（例えば、スパイ活動が不可能な部署への異動など）を優先⁷。そうした合理的理由だけでなく、それまでの失態の隠蔽あるいはエリート同士の庇いあいの側面も強かった（たとえば、後で言及するヒスなど）。

ソ連の原爆スパイ活動は極めて大がかりなものであり、1949 年の段階で実験に成功するのに決定的貢献をしたことは確実（最大の「功労者」の一人セオドア・ホールは摘発されず、物理学者として成功した人生を送る）。1950 年に始まった北朝鮮による韓国侵略の背後にスターリンそして毛沢東がいたことは今や公知の事実であり、米国との直接対決に非

⁴ Sakmyster (2011, p. 184)。

⁵ Kengor (2010)。

⁶ 当節は一部、福井 (2003) に拠る。

⁷ Haynes and Klehr (2003, p. 297)。

常に慎重であったスターリンの南侵へのゴーサイン⁸、劣勢となった北朝鮮を全面支援する中国の直接参戦決断⁹、原爆投下を主張するマッカーサー解任に代表される米国の戦争限定化¹⁰において、ソ連の原爆保有は無視できない要因。つまり、原爆スパイ活動の成功が挑戦戦争の開始とその後の動向に大きな影響を与えた¹¹。なお、Jian (2001)と Sheng (1997)は中国側資料をもとに、中ソ関係は従来の見方と異なりイデオロギーで結びついた緊密なものであり、対米参戦に毛沢東が非常に積極的であったことを明らかにした。毛沢東は当初から筋金入りの共産主義者。

悪名高い「ケンブリッジ・スパイ」もヴェノナに登場。ドナルド・マクレーンとガイ・バージェスは、ヴェノナによる暗号解読が進み、捜査の手が迫っていることを、米国政府からヴェノナ情報を提供されていたキム・フィルビーから告げられ、1951年にモスクワに逃亡。しかし、ソ連のスパイ網が浸透していたのはイギリス政府だけではなかった¹²。米政府中枢にもソ連のエージェントは入り込んでいた。

3. 政府高官のスパイ活動¹³

ヴェノナは、ヘンリー・モーゲンソー財務長官に高く評価され次官にまで昇進し、戦後はIMF米国代表理事となったハリー・デクスター・ホワイトが米政府内で最も高い地位に上り詰めたソ連エージェントであったことを示した。モーゲンソーはルーズベルト夫妻の個人的友人で大統領の信任が篤く、所管外の事項、特に外交に強い影響力。つまり、ホワイトはモーゲンソーを通じて、ルーズベルトつまり米国の国策を左右。

ホワイトは政権のトップ・シークレットをソ連に伝えるだけでなく、ソ連エージェントを採用し庇護することで、財務省をソ連スパイ活動の金城湯池に。さらに、ホワイトは、米国で教育を受けた中国人経済学者で中国共産党秘密工作員の冀朝鼎を重慶に送り込み、国民党政府の金融財政を内部からサボタージュ。自らも、部下で同じくソ連のエージェントであるフランク・コーとソロモン・アドラーとともにモーゲンソーを欺き、インフレ沈静化のための米国による中国への金輸出を妨害することで、国民党支配地域の経済混乱に拍車。

そして、KGBによる雪作戦への関与。ハル・ノートのもととなったモーゲンソー試案を作成したのがホワイトであり、それにソ連が関与していたことを元KGB 工作員ヴィタリ・パヴロフが1995年に明らかに。ただし、須藤(1999)にもまとめられているその証言内容は必ずしも信用できない¹⁴。

パヴロフは、ホワイトはソ連のエージェントではなく、ファシズム勢力とたたかうために、進歩的思想信条に基づき民主主義陣営の同志であるソ連に自発的に協力したというス

⁸ Haynes and Klehr (1999, p. 11)、Zubok and Pleshakov (1996, pp. 149-150)。

⁹ Goncharov et al. (1993, p. 223)。

¹⁰ Gaddis (1997, p. 106)。

¹¹ Haynes and Klehr (1999, p. 11)、Romerstein and Breindel (2000, pp. 253-254)。

¹² ヴェノナのイギリス関連部分については West (1999)参照。

¹³ ヴェノナは、初版発行時(1995年)荒唐無稽とも思われた中川(2000, 第2章)の主張のかなりの部分が真実であったことを示した。

¹⁴ Haynes and Klehr (1999, p. 412)。

トリーを展開。この民主主義（英米ソ）対ファシズム（日独伊）という対立図式は日露領土交渉で見せるロシアの歴史認識と同じ。こうした旧ソ連謀略活動のロシア政権による「美化」は謀略の二次被害をもたらしかねず、注意が必要。

ヴェノナは、長い間、ローゼンバーグ夫妻と並んで「赤狩り」の犠牲となった悲劇の主人公とされてきたアルジャー・ヒスがソ連のエージェントであったことも示した。ヒスは東部エスタブリッシュメントの一員であり、早くから國務省のスターといわれ、第二次大戦が終わる頃には國務長官上席補佐官であり、ヤルタ会談にも同席し、国連創設にも関与。戦後のヤルタ体制形成過程にソ連の内通者が入り込んでいたということ。

スパイはホワイトハウス内部にも浸透。経済担当の大統領補佐官ラクリン・カーリーはホワイトらと密接に協力し、米国の中国国民党支援を妨害。さらに、カーリーは、ルーズベルトが表向きの支持表明と異なり、反共のポーランド亡命政府を切り捨てるつもりであることをソ連に伝達。スターリンは、ポーランド問題に関しては妥協する必要がないことを知ったうえで、米国との交渉に臨むことができた。

そもそも、第二次大戦は、ポーランドの独立を守ることを理由として、英仏が対独宣戦布告したことで開始。ポーランド問題は米国内の保守勢力やカトリックにとって中心的政治課題であり、ヤルタ体制が大西洋憲章への裏切りであるという批判が当時から存在したものの、こうした声は無視¹⁵。

しかし、ポーランド人ヨハネ・パウロ二世は、ヤルタを「現代の道徳的破滅の象徴」と捉えていた。そして、法王と密接に協力していたのがレーガン大統領¹⁶。2005年の対独戦勝六十年に際してのブッシュ大統領によるヤルタ批判はその延長線。

カーリーはさらに暗号解読成功前の段階で、ヴェノナ・プロジェクトが進行していることを知り、ソ連に通報。おそらくカーリーの差し金で1944年にホワイトハウスからソ連暗号電信の解読を中止するよう圧力。しかし、ヴェノナの責任者であるカーター・クラーク大佐が無視したことで事なきを得た。

なお、トルーマン大統領はルーズベルトのように親ソ政治家であったわけではなく、1947年3月には政府職員に対する忠誠確認プログラムを導入し、CIAも同年に設立したけれども、トルーマンと情報機関の関係は最後までしっくり行かず、オマー・ブラッドレー陸軍参謀総長（のちに初代統合参謀本部議長）はヴェノナ文書をトルーマンに直接見せなかったとされる。また、そもそもトルーマン政権下では危険分子（security risk）を「穏便」に処理（自発的退職を促すなど）ことが優先。さらに、情報機関同士の連携も円滑であったわけではない。比較的早い時期（1948年）から情報を提供されていたFBIと異なり、ヴェノナを担当する軍の情報機関NSAがCIAとの連携を始めたのは1952年になってから¹⁷。

ルーズベルト第3期政権の副大統領で第4期には商務長官となったヘンリー・ウォレスは、ルーズベルトを継いだトルーマンの閣僚であったにもかかわらず、ソ連との対立が明白となった1945年10月にソ連工作員と会い、自国の大統領を誹謗し、自らの親ソ姿勢

¹⁵ Powers (1998, pp. 181-173)。

¹⁶ Powers (1998, pp. 400-406)。仲介役を果たしたのが欧州反共社会民主主義勢力。

¹⁷ Haynes and Klehr (1999, p. 15)。

を強調¹⁸。もし、第4期就任直後ではなく、第3期中にルーズベルトが死んでいれば、ウォーレス大統領をヒス国務長官とホワイト財務長官が支えるというソ連「傀儡政権」が誕生していたかもしれない(1948年トルーマンが再選された大統領選にウォーレスは共産党フロント組織の進歩党候補として出馬)。

4. ヴェノナと日本

容共リベラルからはでっち上げと言われ、日本とも因縁浅からぬアメリカ事件¹⁹についても、やはりソ連の謀略の手。『アメリカ』は太平洋問題調査会(IPR)の準機関誌ともいべき存在で、編集兼発行人フィリップ・ジャフィは共産党書記長でソ連エージェントのブラウダーと極めて親しく、従妹がこれまた前述の中国共産党秘密工作員冀の妻という、親ソ親共の赤い資本家。ジャフィと頻繁に接触していたジョゼフ・バーンスティンがGRUのエージェントだったことをヴェノナが解明。ちなみに、IPRには冀、バーンスティンをはじめゾルゲ・スパイ網の尾崎秀美、西園寺公一、アグネス・スメドレー、陳翰笙²⁰ら関わっていたほか、ヴェノナにより、中心的メンバーでGHQの一員だったトマス・ビッソンがGRUエージェントだったことも明らかに。

漏洩機密文書に基づく記事が掲載された『アメリカ』をめぐる、1945年6月にジャフィはもちろん、国務省親中共派「チャイナ・ハンズ」の主要メンバー、ジョン・スチュワート・サーヴィスを含め計六人が逮捕されたものの、スパイ事件がいつのまにか言論弾圧事件にすり替わり、逮捕時の国務省の総責任者であった前駐日大使ジョゼフ・グルー国務次官は、メディアによる批判の矢面に立たされ、省内での影響力喪失(正式辞任は8月)。背後には、エリート外交官サーヴィスを守ろうとするトルーマン政権内の策動があり、梯子を外されたエドガー・フーバーFBI長官と政権中枢の関係は陰悪に。結果的に、国務省の極東政策はグルーとユージン・ドーマンの知日派反共ラインから、反蒋介石・親毛沢東の「チャイナ・ハンズ」を重視する、次官補から昇格したディーン・アチソン次官とジョン・カーター・ヴィンセント極東局長主導に。

逮捕された六人の一人マーク・ゲインは何の罪にも問われず、その後、日本で鳩山追放の先頭に立つ。そして、事件発覚時、反グルーの強硬な論陣を張ったジャーナリストのひとりが、『秘史朝鮮戦争』で南が北に戦争を仕掛けたと主張したI・F・ストーン。ストーンはヴェノナによりKGBと「友好的」意見交換をしていたことが明らかになっており、KGB元工作員は1968年のソ連のチェコ侵攻までその関係は続いたと証言²¹、さらなる調査研究の結果、ソ連エージェントであったことが示された²²。

なお、IPRは東アジアに関心を持つ「進歩的」知識人が集まる国際団体とされていたけれども、内実は古典的Münzenberg Communist front²³で、FBIにもマークされていた。なお、

¹⁸ Weinstein and Vassiliev (1999, pp. 283-285)。

¹⁹ 事件の詳細については Klehr and Radosh (1996)を参照。

²⁰ 陳については Yu (1995)を参照。

²¹ Haynes and Klehr (1999, p. 247-249)、Romerstein and Breindel (2000, pp. 432-439)。

²² Haynes et al (2009, pp. 146-152)。

²³ Costello (1989, p. 442)の表現。ウィリー・ミュンツェンベルクはコミンテルン工作員。

ヴェノナには名前が出なかった秘密共産党員フレデリック・フィールド（大富豪ヴァンダービルト家の一員）は IPR の資金源であるとともに、チェンバーズ・スパイ網の一員。*American Peace Mobilization* という共産党フロント組織を使って、独ソ不可侵条約に沿って、1941 年 6 月 22 日に独ソ戦争が始まるまで、米国参戦反対運動を行っていた。もちろん、その翌日から熱烈な参戦論者に豹変。

さらに日本占領政策の見直しも必要。GHQ 内のソ連エージェントとして、ヴェノナは前記ビッソンとフィリップ・キーニーを特定。ただし、ハーバート・ノーマンは、オーウェン・ラティモア同様、ヴェノナには登場しない。とはいえ、両者ともソ連エージェントであることが特定されている人物と極めて近かった。特に、前述のカーリーと親しかったラティモア（カーリーの推挙で蒋介石の顧問として重慶に派遣）は、1930 年代後半のソ連肅清裁判を正当化し、ウォーレス副大統領の顧問格と一緒に訪問したシベリアのコリマ収容所を地上の楽園であるかのように賛美している。スパイであったかどうかはともかく、米国におけるスターリンの模範的宣伝担当者であった。

占領政策の転換いわゆる「逆コース」はスターリンに対する防御的反撃ともいえる。数々の GHQ 職員を共産主義者としてリストアップ²⁴し、スメドレーをコミンテルン・エージェントと名指した²⁵チャールズ・ウィロビー少将は、反共パラノイアの極右軍人ではなく、ソ連の対日工作の核心に迫っていた。GHQ における情報担当最高責任者として、ヴェノナ文書の内容を知っていた可能性もある。

占領下初期の経済政策は、日本の経済体制は暗黒の政治体制を支えた「遅れた」ものであるという前提で、徹底的な改造（というより破壊）を企図。その背景にあったのが GHQ 内外のソ連エージェント及びその周辺が作り上げた戦前日本の社会観であり、「講座派」のそれと同じもの。ただ、GHQ 内ニューディーラーがソ連の直接の指示を受けていたか否かにかかわらず、こうした発想は米政権中枢にとっても都合がよかった。だからこそ、今でも、日本の占領政策は独裁政権を民主化した最大の成功例として取り上げられる。

しかし、実際、彼らの「構造改革」は誤った認識に基づく机上のプランであることがすぐに明らかになり、迷走状態に。たとえば、傾斜生産方式はまったく効果なし。幸いなことに、日本占領は間接統治であったため、吉田政権は日本経済が決定的ダメージを受けないよう、GHQ による過度の統制を阻止。この状態を見ていた池田の統制嫌いは有名。

民意は、明らかに一貫して保守政党とくに自由党を支持。これは戦前の政党内閣との継続性のある古典的自由（放任）主義経済政策を支持していたことに他ならない。国民が望んでいたのは、戦時体制以前への回帰。こうしたなか、ニューディーラーたちは機会主義者であるマッカーサーの庇護を失い、共産主義者の浸透への危機感がトルーマン政権内部でも高まったことから、無謀な経済政策からの転換が図られ、ドッジが来日する前に、日本経済は軌道に乗り始めていた。

まず「遅れた」経済体制が変革され、その混乱をドッジ・プランで收拾したという通説は神話²⁶。

²⁴ ビッソン、キーニーともウィロビー（1973）で言及。

²⁵ 陸軍中央がスメドレーの脅かしに屈したなかで、Willoughby (1965[1952])で個人名を公表。

²⁶ 「逆コース」以前のニューディーラーによる出鱈目な経済政策については三輪・ラムザ

5. 米国そして日本の歴史見直し：共産主義の世紀としての二十世紀

ソ連スパイ網の米国への大がかりな浸透を示すヴェノナ文書の内容はまさに衝撃的。しかし、ヴェノナによって初めてソ連によるスパイ活動の存在が明らかになったわけではない。例えば、ヴェノナ文書公開のはるか以前から、Radosh and Milton (1997[1983])によりローゼンバーグ夫妻がソ連のエージェントであったことは明白に示されていた。また、チェンバースは、ドイツのポーランド侵攻開始直後の1939年9月にアドルフ・バーリ国務次官補に直接面会し、ホワイト、ヒス、カリーを始めとする政府内ソ連エージェントの実名をあげて告発。さらに戦後、ベントレーらとともに議会で証言。ヴェノナ文書自体、公開前からWright (1987)など一部関係者がその内容をリーク。

しかし、米国の多くの知識人は、ソ連のスパイ活動を右翼勢力による根拠薄弱なでっち上げであると主張。ヴェノナ文書公開はこうした主張に鉄槌を下すことになったという意味で画期的。ただし、Haynes and Klehr (2003)が怒りを込めて記すように、ヴェノナによってスパイであることが決定的に示された米国人ソ連エージェントがスパイではないと強弁する学者や知識人が今でも存在。

Haynes and Klehr (1999, p. 337)が指摘するとおり、ヴェノナはソ連が米国を友好国ではなく、対独戦をとともに戦っていたときから、一時的に協力しているだけの敵国として扱っていたということを疑問の余地なく示した。冷戦は米国の戦後反共政策がもたらしたのではなく、スターリンによってはるか以前から仕掛けられていた。あるいは、さらに遡って、Pipes (2006)が指摘するように、”The cold war really began with the founding of the Soviet state in late 1917”とすらいえる²⁷。

そもそも、スターリンは1937-1938年の大粛清以来、武力による全欧州共産化の準備を進めており、ヒトラーが1941年6月に独ソ戦を開始せずとも、スターリンはいずれドイツを攻撃するつもりであった可能性が高いことも指摘されている²⁸。

共産主義運動が大衆的基盤をほとんど持たなかったという点で米国と戦前の日本は共通。その米国で政権上層にソ連に忠誠を誓った共産主義者が想像以上に浸透。昭和初期日本の一見過剰とも思える防共政策に関し、ソ連による想像以上の謀略工作²⁹を勘案すれば、「特高警察と日本共産党との闘争は... 大日本帝国とソ連邦との形を変えた戦争＝『冷戦』³⁰という見方も可能。一方で、反国民党で一致していた日本軍と中国共産党は「敵の敵は味方」ともいべき関係にあったことをYu (1996)らが明らかに。

仏ソ連携に熱心だったフランス中道右派の有力政治家ピエール・コット空相など、他国のスパイもヴェノナに登場。フランス政府は極秘裏にヴェノナ文書を提供されるも、発覚

イヤー (2004a, 2004b, 2005)、Miwa and Ramseyer (2005, 2009)を参照。

²⁷ 米国は革命後のソ連に決して敵対的であったわけではなく、Kennan (1958)が指摘するように、日本などと違いロシア革命後の内戦干渉に積極的ではなかったし、Chmelnizki (2009)によれば、1930年代の軍備増強にも米国産業界は大きく貢献したとされる。

²⁸ 冷戦期に出た Topitsch (1985)と Suvorov (1990)を嚆矢とし、冷戦後の解禁文書を用いた研究には、Chmelnizki (2011)、Hill (2008; 2009)、Magenheimer (2000)、Suworow und Chmelnizki (2009)などがある。

²⁹ 三宅 (2010)。

³⁰ 坂本 (2001, 90頁)。

時、コットは引退していたので、そのままに³¹。この件に限らず、ヴェノナ文書は同盟国情報機関に提供されたとされるものの、日本政府は情報を知らされていたのか。

さらに、戦後も、ソ連が対 NATO 諸国のみならず、日本でも大規模な諜報活動を行っていたことは、イギリスに亡命した KGB 職員が持ち出したミトローヒン文書 (Andrew and Mitrokhin 1999, 2005) で明らかに³²。

今こそ、伊藤 (2001, 451 頁) が提唱するように、日本人には共産主義とその鬼子であるナチズムに翻弄された、米英ソという真の大国の圧倒的影響下にあった「二流の大国」日本の歩みを再検討することが必要。共産主義者によるスパイ活動を *manufactured hysteria* として無視する時代は去ったにもかかわらず、冷戦後明らかになった資料はまだ十分、米国でも現代史研究に取り入れられていない³³。ヴェノナ文書は米国だけでなく、日本の現代史を考えるうえでも欠かせない資料。

補足. ラティモア：赤狩りの犠牲者、それともスターリンの代理人？

ラティモアは、米国共産党系雑誌 *New Masses* (1945 年 7 月 3 日号) の推薦図書でもあった自著³⁴で、次のようなモンゴル観を表明している。

In Asia, the most important example of the Soviet power of attraction beyond Soviet frontiers is in Outer Mongolia. It is here that we should look for evidence of the kind of attraction that Russia might offer to Korea in the future. Outer Mongolia may be called a satellite of Russia in the good sense; the Mongols have gravitated into the Russian orbit of their own accord (and partly out of fear of Japan and China); they have neither been subjected to a military conquest nor sold to the Russians by traitors among their own people...there is a treaty of alliance between the two countries – but without assertion of Soviet sovereignty or control. Mongol officers study in Russia, and the army is Soviet-equipped, but Mongol-commanded... Soviet policy in Outer Mongolia cannot be fairly called Red imperialism... Russo-Mongol relations in Asia, like Russo-Czechoslovak relations in Europe, deserve careful and respectful study.

こうした米国におけるあからさまなスターリンの「代理人」を、著名なモンゴル研究者³⁵が、「赤狩りの犠牲」となったモンゴルを理解する人道的・進歩的研究者として描いているのが日本の学界の現状。あるいはスターリンこそ人道・進歩主義の雄なのだろうか。

³¹ Haynes and Klehr (1999, pp. 211-212)。実は、Wright (1987, pp. 239-241)によって、ヴェノナ公開前に「暴露」されている。

³² ただし、ミトローヒン文書は、偽造であることが明らかになっている田中上奏文が本物であるとしている (Andrew and Mitrokhin 1999, pp. 37-38)。

³³ Haynes and Klehr (2006)、Klehr (2010)所収の論文などを参照。

³⁴ Lattimore (1945, pp. 141-143)。

³⁵ 田中 (2009, 61-66 頁)。

参考文献

- 伊藤隆 (2001) 『日本の近代 16 : 日本の内と外』 中央公論新社。
- C. A. ウィロビー (1973) 『知られざる日本占領 : ウィロビー回顧録』 番町書房。
- 坂本多加雄 (2001) 『求められる国家』 小学館。
- 須藤眞志 (1999) 『ハル・ノートを書いた男 : 日米開戦外交と「雪」作戦』 文藝春秋。
- 田中昭彦 (2009) 『ノモンハン戦争 : モンゴルと満州国』 岩波書店。
- 中川八洋 (2000 [1995]) 『大東亜戦争と「開戦責任」 : 近衛文麿と山本五十六』 弓立社。
- 名越健郎 (1994) 『クレムリン秘密文書は語る』 中央公論社。
- 福井義高 (2003) 「米国の左翼、ヘレン・ケラーからリベラルまで」 『海外事情』 51 巻 7・8 号 40-53 頁。
- 福井義高 (2006) 「東京裁判史観を痛打する『ヴェノナ』のインパクト」 『正論』 5 月号 (通巻 410 号) : 88-99 頁。
- 三島由紀夫 (1967) 『葉隠入門』 光文社。
- 三宅正樹 (2010) 『スターリンの対日情報工作』 平凡社。
- 三輪芳朗+J・マーク・ラムザイヤー (2004a) 「経済規制の有効性－「傾斜生産」政策の神話 (1)」 『経済学論集』 70 巻 2 号 : 2-54 頁。
- 三輪芳朗+J・マーク・ラムザイヤー (2004b) 「経済規制の有効性－「傾斜生産」政策の神話 (2・完)」 『経済学論集』 70 巻 3 号 : 60-119 頁。
- 三輪芳朗+J・マーク・ラムザイヤー (2005) 『「戦後日本の経済システム」という神話』 『環』 22 巻 : 206-218 頁。
- Andrew, C., and V. Mitrokhin. 1999. *The Sword and the Shield: The Mitrokhin Archive and the Secret History of the KGB*. Basic Books.
- Andrew, C., and V. Mitrokhin. 2005. *The World Was Going Our Way: The KGB and the Battle for the Third World*. Basic Books.
- Benson, R. L., and M. Warner. 1996. *Venona: Soviet Espionage and the American Response, 1939-1957*. National Security Agency and Central Intelligence Agency.
- Chmelnizki, D. 2009. Panzer für Getreide: Amerikanischen Wurzeln der Sowjetischen Rüstungsindustrie. In Suworow und Chmelnizki, *Überfall auf Europa*.
- Chmelnizki, D. (Hrsg.) 2011. *Die Rote Walze: Wie Stalin den Westen Überrollen Wollte*. Pour le Mérite.
- Costello, J. 1989. *Mask of Treachery*, Revised and Updated. Pan Books.
- Evans, M. S. 2007. *Blacklisted by History: The Untold Story of Senator Joe McCarthy and His Fight against America's Enemies*. Crown Forum.
- Gaddis, J. L. 1997. *We Now Know: Rethinking Cold War History*. Oxford University Press.
- Goncharov, S. N., J. W. Lewis and Xue Litai. 1993. *Uncertain Partners: Stalin, Mao, and the Korean War*. Stanford University Press.
- Haynes, J. E., and H. Klehr. 1999. *Venona: Decoding Soviet Espionage in America*. Yale University Press. [邦訳 : 『ヴェノナ』 (PHP 研究所)]
- Haynes, J. E., and H. Klehr. 2003. *In Denial: Historians, Communism and Espionage*. Encounter Books.
- Haynes, J. E., and H. Klehr. 2006. The Historiography of Soviet Espionage and American Communism: From Separate to Converging Path. Working Paper, European Social Science History Conference, Amsterdam.
- Haynes, J. E., H. Klehr, and A. Vassilev. 2009. *Spies: The Rise and Fall of the KGB in America*. Yale University Press.

- Hill, A. 2008. The Icebreaker Controversy and Soviet Intentions in 1941: The Plan for the Strategic Development of Soviet Forces of 15 May and Other Key Documents. *Journal of Slavic Military Studies* 21 (1): 113-128.
- Hill, A. 2009. *The Great Patriotic War of the Soviet Union, 1941-45: A Documentary Reader*. Routledge.
- Jian, C. 2001. *Mao's China and the Cold War*. University of North Carolina Press.
- Kennan, G. F. 1958. *The Decision to Intervene: Soviet-American Relations, 1917-1920, Volume II*. Princeton University Press.
- Kengor, P. 2010. *Dupes: How America's Adversaries Have Manipulated Progressives for a Century*. ISI Books.
- Klehr, H. 2010. *The Communist Experience in America: A Political and Social History*. Transaction Publishers.
- Klehr, H., J. E. Haynes and K. M. Anderson. 1998. *The Soviet World of American Communism*. Yale University Press.
- Klehr, H., J. E. Haynes and F. I. Firsov. 1995. *The Secret World of American Communism*. Yale University Press. [邦訳：『アメリカ共産党とコミンテルン：地下活動の記録』（五月書房）]
- Klehr, H., and R. Radosh. 1996. *The Amerasia Spy Case: Prelude to McCarthyism*. University of North Carolina Press.
- Lattimore, O. 1945. *Solution in Asia*. Little, Brown and Company.
- Magenheimer, H. 2000. *Entscheidungskampf 1941: Sowjetische Kriegsvorbereitungen – Aufmarsch – Zusammenstoß*. Osning.
- Miwa, Y., and J. M. Ramseyer. 2005. The Good Occupation. CIRJE Discussion Paper, University of Tokyo.
- Miwa, Y., and J. M. Ramseyer. 2009. The Good Occupation – or Vindictive? In *Law and Practice in Postwar Japan: The Postwar Legal Reforms and Their Influence*. Blakemore Foundation and International House of Japan.
- Pipes, R. 2006. Back in the USSR, Review on J. L. Gaddis, *The Cold War: A New History*. *Commentary* 121 (2): 66-67.
- Powers, R. G. 1998 [1995]. *Not Without Honor: The History of American Anticommunism*. Yale University Press.
- Radosh, R., and J. Milton. 1997 [1983]. *The Rosenberg File*, Second Edition. Yale University Press.
- Romerstein, H., and E. Breindel. 2000. *The Venona Secrets: Exposing Soviet Espionage and American Traitors*. Regnery Publishing.
- Sakmyster, T. 2011. *Red Conspirator: J. Peters and the American Communist Underground*. University of Illinois Press.
- Schlesinger, A. M. 1946. The U. S. Communist Party. *Life* July 29: 84-96.
- Sheng, M. M. 1997. *Battling Western Imperialism: Mao, Stalin, and the United States*. Princeton University Press.
- Suvorov, V. 1990. *Icebreaker: Who Started the Second World War*. London, U.K.: Hamish Hamilton.
- Suworow V. und D. Chmelnizki (Hrsg.). 2009. *Überfall auf Europa: Plante die Sowjetunion 1941 einen Angriffskrieg? Pour le Mérite*.
- Topitsch, E. 1985. *Stalins Krieg: Die Sowjetische Langzeitstrategie gegen den Westen als Rationale Machtpolitik*. Olzog.
- Weinstein, A., and A. Vassiliev. 1999. *The Haunted Wood: Soviet Espionage in America – The Stalin Era*. Random House.

- West, N. 1999. *Venona: The Greatest Secret of the Cold War*. Harper Collins.
- Willoughby, C. A. 1965 [1952]. *Shanghai Conspiracy*. Western Islands.
- Wright, P. 1987. *Spycatcher: The Candid Autobiography of a Senior Intelligence Officer*. Viking.
- Yu, M. 1995. Chen Hansheng's Memoirs and Chinese Communist Espionage. *Cold War International History Bulletin* 6/7: 273-275.
- Yu, M. 1996. *OSS in China: Prelude to Cold War*. Yale University Press.
- Zubok, V., and C. Plechakov. 1996. *Inside the Kremlin's Cold War: From Stalin to Khrushchev*. Harvard University Press.